

(城西人文研究第19巻第2号)

道化のコンセプト

小野 昌

序

シェイクスピアの劇には、さまざまな道化が登場する。それは喜劇だけにはとどまらず、喜劇にも、悲劇にも、そして歴史劇にも現れて劇にさまざまな要素を付け加えている。それは必ずしも道化そのものが登場することを意味するばかりではなく、例えば悲劇の主人公が、意図的に道化役を演じたり、あるいはまた、結果的に演じるはめに陥ったりする。この道化という存在は、歴史的に観るならばシェイクスピアの時代のはるか以前から存在していた。この稿では、道化をあらわす英語の fool の語源をてがかりにしながら、この道化という不思議な存在の、歴史的変遷をたどり、かつその現代的な意味を考えていきたいと思う。

I. fool の語源と意味

fool の語源は、「鞆、風袋」を意味するラテン語の follis からきている。道化の口から出ることばはナンセンスで、風のような点では、確かに鞆に似ている。follis は印欧祖語 bhel- (吹く) の有声閉鎖音 bh がラテン語の f に変化したものであり、「道化師」を示す英語の buffoon も、「パット息を吐く」という意味のイタリア語の buffare からきている。

OED によると, fool は次のような意味で用いられている。

- ① 判断力や分別に欠けた人。馬鹿げたおこないや、振舞をする人。阿呆。
(聖書の用法として、邪しな人、不敬な人にも用いられる)
- ② 他の人に娯楽を与える目的で馬鹿なまねをするのを職業とする人。お抱え道化師、サーカス道化。
- ③ 馬鹿にみえるようにさせられている人。他人にだまされている人。かもになっている人。

一般的に、「道化」といった場合には、②の意味で用いられているが、しかし道化には、①や③の意味合いも含まれており、その衣装のただら服さながら、そのありようもまた複雑である。要するに fool とは、白痴じみた、狂った人間であったり、また状況によってそのような人間にされてしまっている人。生れつきの馬鹿であったり、そうでない場合もあるが、その愚かさ加減を他人のためにまねてみせている人間のことをいうのである。Elizabeth I の時代には、「生得」(natural) の fool と「佯狂」(artificial) の fool を区別するようになり、「愚行をまねるのを職業とする」のが、後者の artificial fool なのである。

II. クラウン、ピエロ、そしてジェスター

現代のサーカスなどに登場する道化役は、英語ではふつう clown と呼ばれている。OED によると clown はもともとは clod (土の塊), clot (ぬるぬるした塊), lump (塊) を意味しながら、無骨な田舎者をも表すようになっていった。そして田舎者は都会人には滑稽にみえるところから、「滑稽な人」、「道化師」、「お抱え道化」をさすようになった。この種の道化が起こすおかしさには、人間社会の、ある一定の社会規範が理解出来ずに行動するために起こされる滑稽さに主眼がおかれており、その馬鹿さ加減を故意に人に見せびらかす人間が clown なのである。シェイクスピアは、clown と fool をほとんど同義語として用いているが、foolの方が広い意味と多様性を内包する語で

あり、fool が賢さ、後述する wise fool を意味する場合があるのに対し、clown が「英知」を示すことはないのである。

Pierrot は16世紀の中頃、イタリアの各都市で起こり、ヨーロッパ中にまでひろがっていった *commedia dell'arte* というイタリアの即興喜劇の登場人物に起源がある。彼は *Arlecchino* という、活動的で男性的な役の相手役であり、*Pierrotte* または *Pedrolino* とよばれた、内気でメランコリックな役どころをさしており、白い衣裳に仮面の姿であった。そんな Pierrot の仮面をはずし、顔におしろいを塗るようにしたのは、ドミニックこと、*Giuseppe Domenico Biancolelli* (1637-1688) であった。このピエロ役を不朽のものとしたのは、フランスのフュナンビュル座のマイム役者、「悲しきクラウン」、*Jean Baptiste Gaspar Duburau* (1796-1846) で、本来笑っていなければならないクラウンに、悲劇的な悲しみの表情を帯びさせ、後にルオーの「悲劇的な道化の顔」やピカソの「アルルカンの死」といった絵題を提供することになるのである。

jester という語もまた、道化のもうひとつの側面を示すことばである。語源からみると *just* は *chanson de geste* (武勲詩) にみられるように、フランス語の *gest* (偉業) からきており、*jester* は茶化すのではなく、英雄的な行為をまともに語る人を意味していた。この語は冗談をいって陽気に浮かれ騒ぐ人一般を指せるが、普通は、「王の道化」(*royal jester*) や「宮廷道化」(*court jester*) というかたちで、王や宮廷に雇われる道化をさすことが多い。

III. 道化の起源

(1) 伴食者から宮廷愚者へ

道化と言う職業の最も古い形を、古代ギリシャやローマの伴食者にみいだすことができる。彼等は人まねや、当意即妙なこたえ、あるいはまた大食の才などで、裕福な家の晩餐の席に呼ばれたり、押し掛けたりして客をからかったり、かなり勝手な振舞をして座を楽しませていた。伴食的な道化のほかにも宮

廷愚者と呼ばれる道化がいた。ローマ帝国においては、裕福な人々は小人や、知能の遅れた奇形の奴隷をもつ習慣があった。宮廷愚者と伴食的なおどけ者との違いは、前者のほうがずっと異常の程度がひどかったことである。彼等には精神的な欠陥があったり、肉体的な奇形があったり、その両方であったりした。そしてローマの市場では値段の高い奴隷は、美少年や美少女よりも、恐ろしい奇形やグロテスクな者であり、その奇形の度が強いほど値も高かったのである。これは肉体の奇形ばかりでなく、心の異常者にも当てはまるものであった。ローマの貴婦人たちのサロンでは、小人が裸で走り回り、彼女たちにとってこの愚者たちは、現代の犬や熊のぬいぐるみの感覚であった。このような人間の怪物性に対する貴族趣味は16世紀の後半まで続いたのである。

(2) マスコットとスケープ・ゴート

古代ローマの貴族たちは単に娯楽としてのみこのような道化を抱えていたわけではなかった。当時の迷信によると、このようなグロテスクな肉体をもつ者は、「邪悪な目」(the Evil Eye)をそらすことができると考えられていた。これは悪意をもったり、羨んだりする人の目で、そのような目ににらまれると、にらまれた人が不幸になるとする俗信であり、かなり最近までヨーロッパやアメリカで流布していた。この肉体的、精神的に奇形をもつ人たちは、他の人々や神の妬みをまねくことがないので、悪しき力から保護され、幸運をもたらす所有物と考えられていたのである。

さらに自らを褒めたり、他人から褒められたりすれば、邪悪な目の妬みを買ったり、嫉妬を喚びおこしたりする。これを避ける最も確実な方法は、自らを蔑むか他人に嘲笑してもらえばよいのである。宮廷愚者の吐く悪口雑言はまさに、それが向けられた人の悪運を、それを口にしてしている道化自身に引きつけることになるのである。それゆえ道化はまさに「魔除け」、つまりマスコットの役割を演じさせられていたことになるのである。

宮廷愚者のもうひとつの考えられる役割は「贖罪の山羊」(scapegoat)である。一年のある季節に人々は自分たちの汚れ、罪、不幸などを、不運な動物、

あるいは人間と結びつけ、それを殺すか、共同体から追放してきた。王は自分の分身として短い期間、王の権威のいくばくかを与えられ、彼の scapegoat として虐待され、殺されることさえある身分低き者、偽王 (mock king) の制度をもっていた。この偽王として宮廷愚者ほどうってつけの者はいなかったであろう。王に対して常に嘲りのことばを浴びせ、王の不幸を担ぎ、一種の精神的な身代りとして彼等は価値をもっていたと考えられる。

silly という英語は、今日では foolish と同様、「愚かな」という意味で用いられている。しかしこの語形になるのは15世紀頃からで、それ以前は seely で、これは古英語の soelig が語源であり happy, lucky の意味で用いられていた。そこから「(神に) 祝福された、信心深い、善良な」(blessed, pious, good) の意味で用いられ、さらに、「罪のない、無邪気な」(innocent, harmless) から、「無力な、あわれな」(helpless, poor) となり、さらに「つまらない、くだらぬ」(insignificant, trifling), そして16世紀後半あたりから、今日と同じ「愚かな」という意味で用いられるようになった。愚者に不幸を移すとき、彼等の文字どおり「幸福」を渡してくれるかもしれなかったのである。

IV. 中世・ルネサンスの道化

(1) 中世の道化——王の影法師——

王とその道化という、今日我々が思い浮かべるイメージは、ヨーロッパ中世にかたちづくられたものである。征服王 William I (1027-87)にも何人もの道化がいた。彼等はギリシャ・ローマ時代のあの道化たちの子孫であるといえる。

この時代の「王」というタイトルは、王権のもつ政治的な権能よりはむしろ、魔術的、宗教的な権能を与えられており、共同体の長たる王は、自然の長でもあり、豊饒というかたちで自然のダイナミズムを促進する役割をも同時に与えられていた。こうして神でもあり人間でもある王は、救済をもたらす存在でありながら、自己の人間存在と王の権能とのほざまで葛藤しなければならなかったのである。

シェイクスピアの悲劇、『リア王』(King Lear)においてリア王が彼のフール以外の一切を剝奪され、フールに、「誰かおしえてくれぬか、このおれが誰かを」というとき、フールは、「リアの影法師さ」と答える。しかしフールこそ、まさに王の影法師といえるのではないか。フールは王の権能の曖昧性と両義性に属しているからである。フールがリア王に、「お前さん、他の肩書はみなすててしまったもの、もって生れたのしか残っていないよ」というのだが、王がその権能のシンボルをなくしたら、本質的には何者であるかを、フールの立場からはっきりと示している。

道化の王に対する嘲弄は王の権能に対する脅威の可能性を想像力の前にさらすことによって、いわば遊戯三昧のうちにその脅威を減らしてしまう機能をもっている。道化が脅かすのは虚構の世界のことであって、実際に脅かすとしてもそれは虚構の世界に転化されてしまう。例えば道化が、「こんな王は首にしとしまえ、おれが王になる」ということによって、その不安を解消することができるのである。つまり王と道化は虚構の世界を借りて馴れ親しんでいたのである。

宮廷愚者の数は14世紀に徐々に増加し、15世紀と16世紀に最高潮に達した。中世の英国においては、教会と俗界とを問わず、大物は道化を所有しており、個人ばかりでなく、団体によっても雇われており、居酒屋や女郎屋でさえその例外ではなかったのである。

(2) ルネサンスの道化——実在のフールたち——

中世の道化が名前も知られることの少ない、いわば無名の批評家であったのに対し、ルネサンスの道化は、個人に関心をもつ時代精神を反映して、名前もその言動も比較的によく知られ、有名な道化は現代の芸能人のような観を呈し、財を成す者さえ現れたのである。このような変化はまずイタリアで起こり、やがて他のヨーロッパ諸国にも広がっていった。

ドイツ、フランス、イギリスでも宮廷愚者たちは、当時の宗教論争に関わる場合が多かったが、英国のピューリタンたちでさえ、愚者を抱えておくことに

対し攻撃を加えることはしなかった。司祭や修道士を風刺する彼等に新教徒たちは共感を覚え、プロテスタントもカトリックも、愚者を政治的不満の効果的で安全な代弁者と考えていたのかもしれない。

① イギリスの道化——アーチャーの場合——

バラ戦争（1455—85）が終結し、宮廷生活の軽薄な側面が現れ始め、王の会計簿にはチューダー王朝（1485—1603）の王たちが多数の道化を抱えていたことが示されている。この時代の道化で特に有名なのは、家つきの愚者（domestic fool）では、Sir Thomas More（1478-1535）の抱えていた、Henry Paterson、宮廷愚者では、Henry VIII（1491-1547）の Will Summers、Elizabeth I の Robert Green、James I（1566-1625）の Archibald Armstrong などである。

Archibald は通称アーチャーと呼ばれており、スコットランドの James VI の宮廷に仕えていた。この王がエリザベス女王の死後、イギリスの James I となったので、アーチャーもお供をしてイギリスの宮廷に入った。彼の口の悪さは特別でしばしば物議をかもした。当時の宮廷の第一の権臣はバッキンガム公爵こと、George Villiers（1592-1628）で、アーチャーは、彼をひどく嫌っていた。そこへ皇太子 Charles とスペイン王女とのあいだに結婚話がもち上がり、バッキンガム公は皇太子のお供をして話をまとめにスペインに行くことになったが、アーチャーも自ら望んで参加した。彼はこのスペインとの政略結婚には反対であり、宮廷での晩餐会のたびごとにその批判をしていた。イギリスの世論は反スペイン的であったから、彼の人気は大いに上がった。

スペインでのアーチャーのふるまいは傍若無人であり、当時としてはタブーの話題であったスペインの無敵艦隊全滅の話などをしゃべり散らしていた。しかしスペイン王室は彼を厚遇し、たくさんの贈物さえ与えている。

② フール退場

アーチャーは次の国王 Charles I（1600-49）にも仕え、先王にもまして厚遇

され1,000 エーカーの土地も与えられた。この国王になって、彼の攻撃の的となったのは、カンタベリーの大主教 William Laud (1573-1645) であった。ロードの推進しようとする新たな宗教政策に対し、アーチャーは激しく反発し、ありとあらゆる悪口雑言を吐いた。この背景には英国国教会とスコットランドのピューリタンとの対立があるのだが、いずれにせよ彼はやりすぎた。ロードの非難がとりあげられ、道化服をはぎとられ宮廷から追出されてしまった。

イギリスにおける宮廷道化師の職務は、意味ある制度としては、Charles I の死とともに終わりを告げた。何かが変わってしまっていた。道化の言動は完全に無責任者のそれであって、責任を与えられていないがゆえに、権力者の見落しがちなものをみることができ、偏見から免れやすいことになる。その意味で彼等の「狂」は神的であり、人間の小さな思慮を超えるとされたのである。王、司祭、そして道化はいずれも同一のメカニズムの中で有効に作用しえたのである。この三者は、神の秩序、人間の不完全さ、祭儀の有効性を信じることで成立っている社会に属していたのである。ピューリタンや科学者、産業の指導者たちの、観念によって支配される世界には、彼らの居場所はなくなっていた。

V. 賢い愚者と愚かな賢者

(1) 愚者ソクラテス

フールの知恵という考え方の裏側には、知恵ある人の無知という考え方が隠されており、このパラドックスはヨーロッパの古典文学に繰返し現れるテーマである。その代表的な例がソクラテスである。

「賢者」を自認するいわゆるソフィストの多いアテネで、「お前より賢い者は誰もいない」というデルポイの神託を受けたソクラテスは、それが信じられず、「賢者」を訪ねては、その神託の嘘妄を明らかにしようとした。しかし問答するうちに、彼はどの「賢者」も何も知らない愚者、しかもそれと自覚しない愚者であることを発見する。このことから彼は神託の意味は、人間のうち

で、最も賢い者は、知恵に関する限り、自分は何の価値も無い者であることを知る者であることを悟るのである。つまり自分は少なくとも愚者であることを知っているがゆえに「賢者」なのだとわかるのである。この「愚」と「賢」との価値基準を逆転させる方法はソクラテス的アイロニーとか産婆術とか呼ばれるが、これはきわめて道化的な方法でもある。

(2) 聖パウロの場合

哲学の場合以上にこの価値の逆転が起こるのは、宗教においてであろう。人間の無知をいうソクラテスのことばは、真の知恵を神にのみ帰する点でキリストの使徒、聖パウロの立場を先どりしている。彼のキリストにおけるフールの考え方は、世間には愚としかみえないキリスト教徒の知恵に比べて、世俗の知恵が無価値なものであり、神の愚は人のそれよりも賢いのだとしている。そして不信心者は自らを知者と称して愚者となるという。我々はキリストのためのフールであり、キリストにおいて賢であるべきだと説くのである。「なんじらのうちにおのれをさとしと思う者あらば、知者たらんためにこの世において愚かなるべし、それは、この世の知恵は神のみ前に愚かなればなり」(コリント人への手紙1 第3章 8～13節)

(3) キリストのパラドックス

聖パウロのいうように、キリスト自身、このような愚や、知の体现者であった。その上キリストの教えはその単純さにおいて、いささか子供じみており、その使われているイメージの単純さにおいてフーリッシュにみえる。そして羊はフーリッシュな動物であると考えられていたにもかかわらず、キリストは「神の仔羊」であった。キリストにおけるワイズ・フールという神学的なパラドックスは、中世全体にわたって、さまざまな著作となって、現れることになる。

Thomas a Kempis (1380-1471) は『キリストにまねびて』(*De imitatione christi*) を著し、フールたるキリストを模範とした聖なる愚直さをキリスト教

徒の生活の規範として勧めた。

Nicolaus Cusanus (1401-64) は『知と無知の一致について』(*De docti-ignorantia*, 1440)などで、「無知の知」を説き、合理的神学を拒否し、人間に知が可能であるかという問題を投げかけたのだが、非合理的な絶対と、論理的な理性の対立から、最終的には一種の知恵を引出している。すなわち彼に先立つソクラテスや、後のモンテーニュ (1533—1592) と同様、コンテクストこそ異なるが、我々が無知であると知ること、それ自体がひとつの知であるというのである。

VI. ヨーロッパ文学と道化

愚者を扱った文学は枚挙にいとまがないが、ギリシャ・ローマ的なワイズ・フールの系譜と、これまで述べてきたキリスト教的なそれとが合流した「キリスト教的人文主義」の観点からみるならば、その頂点に位置する作品は、ロッテルダムの Desiderius Erasmus (?1466-1536) 『愚神礼賛』(*Encomium Moriae*, 1511) といえる。

(1) 女道化師、痴愚神

この作品は3部から成り立っていると考えられるが、いちばんながい第一の場面では愚神は機知に富んだ皮肉な調子で語りかける。「私は多くの召し使いを使って人生劇場という世界を支配し、楽しい世界にしているのですよ」と。召し使いとは「幻想」、「誤解」、「無知」、「快樂」、「自己愛」等々である。そしてお客は子供、女、老人である。子供がかわいいのは何も知らないからであり、知恵がつきだすと憎らしくなる。男女の関係も愚で成立っている。恋に陥ると、愚かなことをやって楽しい。これも愚神のおかげである。人間は互いに勘違いしたり、無知であったり、お世辞をいったりいわれたりすることによって、角が無くなり、人生は和やかになる。これも愚神のおかげと女道化師はいふ。

第2部では彼女はきびしい風刺家になり、世の指導者である聖職者たちが攻撃のターゲットになる。この部分のみが強調され、この書を当時の社会、特に教会に対する批判の書であるとする解釈がなされるのである。

第3部になると、人生とは「世の蔑み」という面からみられ、愚神はキリストの愚者、キリスト教的神秘家となり、聖パウロとクザーヌスから受継いだキリストにおけるフール像を思い起こさせる。人間であることは即ち一人のフールになることになるのだから、神の子であるキリストが人間の役割を受け入れたとき、彼はあらゆるフールの中で最高のフールになったと説くのである。

このようにして、エラスムスは痴愚神という女道化師を演説台に立たせることによって、自ら知的道化を演じてみせるのである。

(2) シェイクスピアの道化たち

シェイクスピアの芝居には、数多くの道化が登場し、古代、中世、ルネサンスの道化の集大成の感がある。演劇というジャンルは世の無数の愚者たちを血肉を具えた具体的な人物として登場させるのに恰好の表現形態なのである。

① 喜劇・歴史劇の道化

喜劇に登場する道化には、人を笑わせるつもりもなく、笑われていることにさえ気づいていない「生れつきの道化」(natural fool)が多い。『ヴェニス商人』のシャイロックの下男、ランスロット・ゴボーとその父親、『むだ騒ぎ』の巡査ドグベリー、『冬物語』の羊飼いの父子、『夏の夜の夢』の職人達の一人、ニック・ボトムなど。宮廷道化としては『十二夜』のフェステ、『お気に召すまま』のタッチストーンなどがいる。これらの役は当時シェイクスピアの劇団にいた有名な喜劇役者、ロバート・アーミン (Robert Armin, ?-1615) によって演じられた。

歴史劇の道化には『ヘンリー4世』1部、2部で登場するジョン・フォールスタッフがいる。彼はよく飲み、よく食べる。大食漢は道化の基本的特徴のひとつである。その結果として当然ながら太鼓腹、そして女郎屋通い。フランス

ワ・ラブレー (François Rabelais, ?1494-1553) 的, カーニバル的な道化である。彼は「フィジス」(ギリシャ語で, 自然, 肉体の意) を「ノモス」(ギリシャ語で法律, 制度の意) より, 人間にとって根源的なものとし, 人間の肉体的本能, 快楽と幸福に対する欲望を「ノモス」の抑圧から開放することをめざした, あの「愚神」の体現者なのである。そして最後にはカーニバル祝祭劇で玉座に座らされ戴冠した道化が共同体の罪を背負って追放されるように, 新しく王となったヘンリー 5 世に追放されるのである。Falstaff というなまえは, fool's staff (道化の杖) との語呂合せと考えられ, 道化の大切な小道具である杖を名前の中にとり入れている。

② 悲劇の主人公が道化の場合

悲劇の中にも道化的な人物が登場する。例えば『マクベス』の門番, 『ハムレット』の墓掘りなどは, 一種の「息抜き」(comic relief) として, 悲劇の効果を高める役割を演じている。『ハムレット』の宮廷には宮廷道化師はいない。王子ハムレットはプロットを推進すべき主人公でありながら狂気を装い, 道化としてふるまっている。しかし道化には主体的に行動を起こし, 状況を変えていく力はないのである。そこで彼が道化ぶりを発揮しているあいだ, 彼の行動は, アクションというよりリアクションに終始せざるをえないことになるのである。しかし, この劇の終わり近くになって, 墓掘が掘出した物はハムレットが子供の頃に遊んでもらった, 宮廷道化師, ヨリックの頭蓋骨であった。このヨリックとの「対面」を境にして, 主人公としてのハムレットの行動が開始されるのである。

『リア王』の場合は宮廷道化が登場し, 道化なしにはリアの悲劇は考えられないほど重要である。この劇はリア王が道化に転落する, いやさらに道化ですらなくなる悲劇である。リアが自分の意志で玉座を降りるという愚行にでたとき, 中世の「阿呆祭」(The Feast of Fools) のさかさまの世界さながら, 王は道化(狂人)へと堕ちていくのである。「馬車が馬を引っぱってりゃ, ろば(=阿呆)にだってわかるだろう」とリアの道化はいう。そしてこのさかさま

の世界が、リアの完全なる狂気によって回復不可能になったとき、道化はこの悲劇的な世界を支えきれなくなったかのように、理由も告げず忽然と舞台の上から消えて、二度と姿を現さないのである。

VII. 道化の世界

これまで現実に存在した道化、そして古代、中世、ルネサンスを通じて文学に登場した道化を概観してきた。最近では神話や民話に登場するトリックスターとよばれるいたずらもの、例えば日本の民話のあまのじゃく、アメリカ・インディアンの民話の奇妙な酋長、アフリカの原住民の神話のいたずら者の野兎なども含め、およそ道化と呼ぶことの出来るあらゆる存在が論じられるようになってきている。そこでこのような「広義の道化」をも含め、道化というものの特徴をいくつかまとめてみよう。

(1) 境界の住人

道化の基本的な特徴の最も中心的なものに人為的な区別の解消がある。例えば近代の社会はあらゆる世界の共通のルールとして、「まじめ」、「不まじめ」のような区別があるが、道化はこのような区別をまったく認めようとしない。「上品」と「下品」、「聖」と「俗」、「善」と「悪」、「優」と「劣」等々、あらゆる文化はその根底にこうした人為的な区別の上に成立しているのである。しかし現実の社会は、このように整然と分類できないのもまた事実である。こうした曖昧な部分こそ、道化の恰好の住処なのである。イギリスの人類学者、ヴィクター・ターナー（1920-83）は日常性の中にある、慣習法、社会構造や分類体系から逸脱し、境界にある人間の曖昧で不確定な属性を「リミナリティ」（liminality 境界状態）と呼んだが、道化こそこのリミナリティを体現している存在である。

道化はこのようさまざまな文化の人為的な区別は全く相対的なものでしかないことを、時に応じて我々の前に示すのである。シェイクスピアの『十二夜』

に登場する羊飼いのコリンズが、「宮廷での行儀作法なんか、田舎へくりゃおかしなものさ。宮廷じゃ挨拶するにゃ必ず手にキスするだとか。宮廷の人で羊飼いだったら、この作法はえらくきたないことだがね」というが、まさにこれは文化の相対的であることを具体的な例で示しており、確立されたエチケットなど道化の好餌なのである。このように道化は日常生活の通念を意識的に錯乱させ、その混沌とした状況の中から、一見関連のなさそうに見えるものを突然関連付けて照しだし、人や物が本来持っていた本源的な輝きを取戻す一助とするのである。道化のもたらす混乱は、事物が再生するための、一時的な死という側面をもっているのである。

(2) 現代の道化の役割

18世紀以降、ヨーロッパでは近代科学と啓蒙主義的な理性万能の考え方が支配的になり、世界についてバラ色の未来を描き出してきた。人間は自然の出来るだけ計量可能な側面だけをとらえ、その法則性を見出すことに主眼がおかれた。自然科学はもちろんのこと、社会科学においてさえ、計量可能な部分に限定して研究する方法がとられた。世界はノモス（規範）とフィジス（肉体）とに恣意的に分類され、フィジスに属する道化的思考は社会の中の異物として人間の進歩に反するあらゆるマイナスイメージを与えられ退場に追いやられたのである。

今日人々はそのような合理主義的、実証主義的な方法だけではこの複雑な現実の世界の現象を把握できないことに気づき始めている。道化はこれまで「異物」として社会から排除されてきたもの、それは狂人であったり、阿呆であったり、不具者であったり、要するに社会の汚いもの、いかがわしいと思われているものを社会の中に取り込む装置なのである。道化を通して我々は、捨てられ、忘れられ、無価値とされてきたものに、新しい意味を見出す術を学ぶのである。こうしてマイナスのエネルギーを社会制度の中に組み込むことによって、硬直した社会からこわばりを取り除き、慣習化された日常的な現実になんか新たな輝きをもたらしうことができるのではあるまいか。山口昌男が『道化的世界』

の中で述べているように、「多層な現実をダイナミックに捉えていく方法論および感受性を鍛えるモデルとして、道化の技術をもはや人は無視することができない」のである。

結 び

これまで述べて来たように、この道化という存在は、文学のみならず、宗教、哲学、そして社会全般にわたって、様々な関わりあいをもつ極めてとらえどころのない存在である。最近の道化に関する研究も多岐にわたっており、歴史や、文学にとどまらず、特に民族学の分野からの貢献にはめざましいものがある。しかもその文献の量も膨大なものとなっている。シェイクスピアに関する道化に関するものだけに限ってもかなりの量にのぼっている。そこでシェイクスピアの個々の作品における道化の問題を扱う前にそもそも道化とはどのような者であるのかを歴史的にふりかえってまとめてみたのである。このような作業によって、シェイクスピアの作品に道化として登場する人物ばかりではなく、他の人物たちの道化的な在り方もうかびあがってくるのであるが、それは次稿にまわさなければならない。

《参考文献》

- (1) イーニッド・ウェルズフォード，内藤健二訳：『道化』，晶文社。
- (2) ウィリアム・ウィルフォード，高山弘訳：『道化と笏杖』，晶文社。
- (3) 山口昌男：『道化的世界』，筑摩書店。
- (4) 高橋康成：『道化の文化』，中央公論社。
- (5) 石井正之助，ピーター・ミルワード監修：『ルネサンスにおける道化文学』，荒竹出版。